

『1941年。パリの尋ね人』における記憶の再構築

坂 東 真理子

Mariko BANDO. Reconstruction of memory in Dora Bruder of Patrick Modiano. *Studies in International Relations*. Vol.42, Consolidated Edition. February 2022. pp.81-92.

In World War II in France, around eighty thousands of Jewish persons were deported to concentration camp and became the victims of the Shoah. The French novelist Patrick Modiano, born in 1945 in Paris, describes a Jewish girl, Dora, who was arrested by French police, then deported at Auschwitz, in *Dora Bruder*. This paper treats the descriptive style of Modiano, who reconstitutes the figure of Dora with an assistance of his memory and his imagination.

第2次世界大戦中、占領時代のフランスでは、フランス・ヴィシー政権の対独協力体制のため、ショアー¹で8万人あまりのユダヤ人²が検挙され犠牲となった。約7万6千人のフランス国内のユダヤ人が強制収容所へ送られ、うち約1万1千人の18歳未満の子供たちも犠牲になった。戦後から現在まで、当時の出来事を記憶にとどめ同じ歴史を繰り返さないため、多くの作家が占領時代のショアーを主題にした作品を様々な手法で発表している。パトリック・モディアノもまた、本論で論じる『1941年。パリの尋ね人』³において占領時代の1941年のパリで、家出を繰り返し、検挙されアウシュビッツ強制収容所へと送られた実在のユダヤ人少女ドラ・ブリュデールの短い生涯を、占領時代を主題にした作品や当時の歴史的資料から着想を得て描いている。

占領時代のパリで、ユダヤ人には様々な社会的差別⁴が課され、ユダヤ人資料番号が与えられ、検挙された多くのユダヤ人は強制収容所へと送られた。当時の資料の多くは破棄され、戦後のパリで犠牲者たちの痕跡の多くは壊され、忘却の彼方へ押しやられてきた。そのような中、1945年のパリに生まれ、戦争で姿を消した人々の存在の痕跡を感じながら成長したモディアノは、『1941年。パリの尋ね人』で、ショアーの体験者による記録文学とは異なる手法でユダヤ人犠牲者の姿を描いている。ドラに関する限られた資料に自らの青年期

の記憶とイマジネーションを加え、モディアノが投影された語り手である「私」による「現在」—1996年と、占領時代の描写の往来という形式によりドラ・ブリュデールの軌跡を描いている。

モディアノにとって、記憶は全作品を通して主要なテーマの一つであり、フィクションの注入された忘却から甦る断片的な記憶という特殊なコンセプトは、大部分の作品で用いられ、作品の詩的表現と深く結びついている。本作品において、モディアノはユダヤ人犠牲者たちの存在の消滅を、残された人々の意識の中の不在と捉えている。自身の出生前に命を落としたドラの姿を再構築し、「忘却の層」から助け出すため、歴史的資料に記憶とフィクションを融合しドラの生前の姿を描くのである。本論では、モディアノが現実の手掛かりにどのように記憶と想像を交錯させ、証言することなく虚無へと追いやられたドラの姿を再構築し、存在を共通の歴史的記憶へと昇華させるのか、作品の詩的表現との関連とその手法を論じる。

第1章 忘却の中の手掛かり

『1941年。パリの尋ね人』の主人公であるドラ・ブリュデールは、父である1899年生まれのオーストリアのウィーンに生まれ、フランス外国人部隊の傷痍軍人となった後パリに労働者として戻り⁵、その後職を失った⁶父エルネスト・ブリュデール

と、1907年にハンガリー・ブダペストに生まれた母セシールの間に1926年2月25日、パリに生まれた。ドラは、占領時代のパリで家出を繰り返し検挙され、1942年9月にアウシュビッツへと送られ16歳で命を落としている。一方モディアノは、1945年パリに生まれた。モディアノの父は、占領時代は検挙を逃れるため複数の身分証明書を使い分け、闇市でのドイツとの取引で生き伸びた「非合法の」「裏切り」ユダヤ人だった⁷父アルベール・モディアノである。モディアノの母ルイズ・コルパンは、戦時中の混乱でベルギーからパリへとたどり着き、フランス映画のオランダ語の字幕作成⁸、戦後は女優として活動した。終戦後のパリで育ち、記憶と忘却の主題への関心を強めていったモディアノは、自身の両親に出会いをもたらした占領時代を「私にとっての原始の夜」⁹と捉え、自身の父も受けたユダヤ人差別の問題に関心をもち続け、作品の主要なテーマの一つとしている。

占領時代のユダヤ人犠牲者たちは、ドイツにより存在を消滅させられ、ドイツによる関連する資料や遺品の意図的な破棄により、多くの存在の証が失われた。そのような中、終戦の年に生まれたモディアノが自身の生前の1942年に検挙されたドラの存在を知り、本作品を執筆するきっかけとしたものがある。1988年にモディアノが目にした1941年12月31日付の新聞『パリ・ソワール』に掲載された「尋ね人広告」¹⁰である。パリ、オルナノ通り41番地のホテルの部屋に暮らしていた両親から離れ、パリ12区ピクピュ通りにあるカトリック修道院の寄宿学校の生徒だったドラの1941年12月14日の1度目の脱走から2週間後、ユダヤ人検挙を実行する役割を果たしていたフランス警察に捜索を願い出た両親が出した尋ね人広告である。モディアノは、一家が住んでいたオルナノ通り界限をよく知っていたこと¹¹、思春期を寄宿舎で生活した自身の記憶から、ドラが脱走したことをすぐに理解する。その際、危険を冒しドラを探す両親の姿に感銘を受けたモディアノ¹²は、第2次大戦中にフランスから強制収容所に送られた犠牲者たちの名前を輸送列車ごとにリストにしたクラルスフェルトの『強制収容所移送者記録名簿—フランスから消えたユダヤ人』¹³を調査している。1942

年9月18日のリストにドラと父を、1943年2月11日のリストに母セシールの名を見つけ、一家の連続した消失を知り衝撃を受け、忘却へと飲み込まれていく「ドラを虚無から助け出す」¹⁴ためドラを主人公とした作品を書くことを決意する。

『レルヌ モディアノ』¹⁵にも公開されているように、モディアノは『強制収容所移送者記録名簿—フランスから消えたユダヤ人』の刊行時の1978年にクラルスフェルトに書簡を送っている。また1994年に続編である11400人近くの18歳未満の子供たちの犠牲者のリストとそのうちの1500名近くの写真を加えた『強制収容所移送者記録名簿—フランスから消えたユダヤ人児童』¹⁶が出版された際、1994年11月2日付の新聞『リベラシオン』に書評を載せている¹⁷。このような経緯でモディアノはクラルスフェルトによる調査で得られた情報、ドラの出生届の写真、親戚に関する情報、ドラと家族の写真、警視庁とドランシー収容所の資料、ニューヨークにあるイーヴォユダヤ調査研究所の「在仏ユダヤ教徒総連合」の資料など、アウシュビッツまでのドラの軌跡に関する重要な資料や書簡を、1994年から1997年まで受け取っている。さらに、モディアノはクラルスフェルトの提供した情報と手掛かりを元に、自身の綿密な資料の調査と取材¹⁸を行い、ドラのアウシュビッツまでの軌跡を再構築している。

ミレイユ・イルスュムが「セルジュ・クラルスフェルト／パトリック・モディアノ 隠蔽にかけられているもの」¹⁹において指摘するように、本作品においてクラルスフェルトの存在は意図的に隠され、彼の調査はモディアノが投影された語り手の「私」の調査として語られている。本作品の出版後にはクラルスフェルトがモディアノに抗議の書簡を送ってさえいる。しかし、マリリヌ・エックが「彼らがそれぞれ個別に行った二重の調査のおかげでドラ・ブリュデールの跡が時と共に姿を現すことができた」²⁰と述べるように、モディアノとクラルスフェルト双方の調査が、数少ない手掛かりからドラの軌跡を明らかにしたのである。次章では、ドラの軌跡からモディアノが自身の記憶を投影しどのようにドラの姿を再構築するのかを論じる。

第2章 記憶の投影

モディアノにおいて記憶は文学作品の「主要な原動力」²¹であり、作品の叙述の主要なモチーフの一つである。モディアノは、本作品において資料には描かれないドラの人生の「空白」²²を、自身の記憶²³で補い、当時の姿を描く手法をとっている。

『1941年。パリの尋ね人』において、ドラの資料はモディアノが投影された本作品を執筆している1人称の語り手の「私」の調査として語られている。クラルスフェルトの存在を覆い隠す一方で、作者モディアノを投影する、フィクションと現実が交錯する特殊な「1人称への統一」は、本作品の主題であるドラの存在を蘇らせるための記憶の叙述と関連がある。作品全体を記憶の主体である語り手の「私」の意識の内面の叙述に統一することで、記憶の想起と想像、現在の思考を往来し、占領時代に関する自身の考察を語り、当時のパリとドラの軌跡を描いている。それにより3人称の特性を時折併せ持つ、特殊な1人称の語り手が現れるのである。

モディアノ作品における記憶の想起には、記憶が意志とは関わらず記憶の主体の意識に戻る場合と、記憶の主体が意志的に忘却から回顧を試みる場合があり、記憶の両義的な性質が再現されている。記憶の主体が回顧を試みる際、回顧を助ける様々な「現実の細部」が存在し、これらの助けにより過去の断片を想起する。本作品において語り手の記憶の想起の手掛かりとなるものの一つが、住所などの地理的情報である。土地の記憶から関連する他の記憶の断片へと移り変わり、連想が広がるのである。

この地理的情報と記憶の関連については、モディアノ自身がノーベル賞受賞の際のディスクールにおいても、住所目録などの地理的情報—記憶術を助ける現実の細部—が自身の土地の記憶を喚起し、想像力を跳躍させ、見知らぬ人々の人生までも読み解くことを可能にすると言及している²⁴。またシリル・グランジュとエリザベス・モルクも「ドラ・ブリュデールの跡に」²⁵で、ドラとは異なる年代のパリに存在した語り手が場所を手掛かりにドラの軌跡を描く点を指摘しているように、本作品

にもパリの地理的要素が深くかかわっている。

本作品において、モディアノの記憶が投影された語り手の「私」は、提供された資料に記された、占領時代に姿を消した人々の存在の痕跡を感じさせる関連する住所へ実際に足を運んだり、パリに生まれた自身が幼少期から青年期に訪れた場所の記憶を意識に想起する。語り手の「私」がその中で当時のドラの姿を想起するにつれて、次第に地理的記憶から呼び起こされた自身の青年期の記憶が断片的に、クロノロジーを伴わずに意識に甦る。この、クロノロジーを欠いた断片的な記憶から無秩序に展開する連想と現在の意識との往来はモディアノ作品の特徴の一つである。本作品においても、語り手の「私」は地理的記憶とそこから甦る断片的な記憶の助けによりドラの当時の状況を理解し、現在の意識との不規則な往来により解釈を加えている。そしてこの記憶の想起は次章で論じるイマジネーションの跳躍を可能にする源となる。モディアノ自身の青年期までの記憶—複数の知人の家を転々とした幼少期、パリ、アヌシーなどの寄宿舎に育ち、戦後も怪しげな商売で生きた父との不仲に苦しみ、パリをさまよった思春期から青年期—が占領時代のパリに生きたドラの状況を理解する助けになるのである。

現実の投影と記憶との融合

ドラは、旧オーストリア人と在外ドイツ帝国民の女性464名あまりがヴェルドルームイヴェールからギュールの強制収容所へ送られた1940年5月に両親と共に住んでいたパリ、オルナノ通り41番地のホテルから、パリ12区ピクピュ通り60, 62, 64番地にあるカトリック修道院のサン・クール・ドゥ・マリー寄宿学校に入れられている。語り手の「私」が「すでに、14歳の時に、彼女は自立したところを示し、ドラの従姉妹が私に話した反抗的な性格が現れていたと推測する。」²⁶と述べるように、ドラは思春期に差し掛かったこともあり、反抗的な性格だった。このサン・クール・ドゥ・マリー寄宿学校の建物は、語り手の「私」が存在し、本作品を執筆する1996年にはなくなっているうえ、「私」には写真も残されていない。語り手の「私」は古いパリの地図と、自身のパリの記憶—

18歳の時に治療を受けた、ドラの住んだ寄宿舎近くのダム・ディアコネス病院の記憶、そしてパリに住みドラの生まれたロスチルド病院と寄宿舎があるこの地区を歩いた青年期の記憶²⁷からドラの生きた占領時代の寄宿舎の情景を描いている。

次に引用する箇所では、ドラの過ごした場所の住所が、モディアノの土地の記憶を想起し、そこから甦る寄宿舎で過ごした作家の青年期の記憶が「私」に投影され、ドラの寄宿舎での厳しい生活を描いている。

1940年6月、ドイツのフランス侵入を許したデバークル（崩壊）の時はシスターと生徒は […] パリを離れメヌエロワールに避難していた。ドラも彼女たちとオステルリッツかオルセー駅でまだ乗ることができていた、人でいっぱいの最終列車で出発したはずだ。 […] 7月の、パリへの帰還。寄宿舎の生活。 […] 私には1日の大体の時間割がわかる。6時頃起床。チャペル。教室。食堂。教室。校庭。食堂。教室。夜の勉強。チャペル。共同寝室。毎週日曜の外出。私にはこれらの壁の間の暮らしはキリストが特惠を示していたこれらの女の子たちにとっては辛かったのではないかと推測する²⁸。

モディアノは、ドラの複数回の家出の背景となる要因の一つであった、当時の厳しい規則の寄宿舎の暮らしを自身の記憶と共に描いている。

また、週に1度だけの毎週日曜日の外出が許されていた当時の状況について、語り手の「私」は地図でドラの軌跡をたどりながら自身の記憶を想起し、ドラの当時の足取りを再構築している。次の引用文の最初の1人称は「現在」からドラの当時の足取りと自身の記憶を語る「語る私」、ふたつ目の1人称は記憶の中の「語られる私」である。

彼女がオルナノ通り41番地のホテルの部屋にまだ住んでいた両親に会いに行っていたのは確かだ。私はメトロの地図を眺め、彼女のたどった道のりを想像しようと試みる。 […] 彼女は映画館とホテルの向かいのサンプロン

駅で降りていた。それから20年後、私もよくサンプロンでメトロに乗っていた。 […] 日曜の午後の終わり、彼女は同じ帰り道を通っていたはずだった。両親は彼女を送っていたのだろうか？ […] それはまるで刑務所に戻るようだった。 […] ²⁹

語り手は自身の地理的情報から想起される記憶の情景を元に、陰鬱で孤独な寮生活へと戻るドラの当時の暮らしを再構築している。危険なパリの街中と不自由で厳しい寮生活により脱走へと向かう、追い詰められたドラの姿を描いているのである。

占領時代と記憶

ドラが脱走した1941年12月はレジスタンス活動による襲撃への報復として、ドイツによるユダヤ人への取り締まりが強化され、1941年12月12日には743人のフランス国籍のユダヤ人の一斉検挙が行われた³⁰。1941年12月8日から14日は、18時以降の夜間外出禁止令が出される危険な状況だったにもかかわらず、1941年12月14日の日曜日に両親の元を訪れた後、ドラは寮に戻らなかった。

ドラの父が住まいだったオルナノ通りのホテル近く、18区のクリニャンクール地区警察にドラの失踪を届け出たのは、ドラの家出から2週間後の1941年12月27日である。語り手の「私」は、その際の警察の記録と警察署の所在地の地理的記憶を出発点に、父が尋ね人広告を出した経緯を想起する。1940年秋のオルナンスでは、ユダヤ人調査のためユダヤ人家庭の世帯主が警察署に出頭し家族も含め申告するよう命じられ、彼らには登録番号が割り当てられた。しかし、その際父はドラを申告しなかった。「私」は、ドラの家出の後、父が警察に失踪を届け出たことが、隠していたドラの存在を警察に明かし、一家が危険にさらされたことを想起し、新聞『パリ・ソワール』に尋ね人広告を掲載するまでの経緯を明らかにしている。

クリニャンクール地区警察署はモンマルトルの丘の後ろ、ランベール通り12番地にあり、署長はシリという名だった。しかしエルネス

ト・ブリュデールは、区役所内の左側にある、モンスニ通り74番地、クリニャンクール地区警察の分署としての役割を果たしていた区の警察署に行っただろう。そこは彼の住まいからより近かった。[…] 私たちはこの長い13日間の彼の恐怖とためらいを想像する。1940年10月の調査で、この同じ警察署に、彼はドラを申告していなかった、警察官たちがそのことに気が付く恐れがあった。娘を見つけようとしたことで、父は彼女への注意を喚起していた[…] おそらく彼は、戦前のようなルーティーンの仕事でしかない、単なるフランス人とエルネスト・ブリュデール、彼の娘を区別しない警察官に出くわしたのだろう。[…] 彼女はフランス国籍だった。思春期の脱走。この混乱した時代にはますます頻繁に起きていた。[…] ドラが失踪してから2週間が経過していたので、その警察官がエルネスト・ブルリュデールにパリ・ソワール紙に告知を載せるよう勧めたのか[…]?あるいは新聞社の社員[…]?³¹

語り手の「私」は地理的記憶を出発点に当時の状況を想起し、モディアノが「死の世界にユリウスを探しに行くオルフェウス」³²と形容する、危険なパリで家出したドラを探しに行く父の姿を描いている。ドラの父は、警察にドラの失踪を届け出るのを2週間待ったが、ドラへの思いと心配にかられ、ユダヤ人検挙を行っていた警察にドラの失踪を届け出てしまう。モディアノは、ドラの状況を理解しない警察官の影響で、ドラを探しだす一方でパリ中の標的としてしまう、両義的で危険な尋ね人広告の掲載へと踏み切る父の盲目的な愛情を描いている。そしてこの届出の数か月後、父自身が検挙されてしまう。

この文に続く次の引用文では、地理的記憶と当時の状況への考察が、モディアノ自身の思春期の家出の断片的な記憶を、語り手の「私」の意識に甦らせる。「私」は自らの過去を回顧的に語り、思春期のモディアノ自身と重なる「語られる私」と、ドラの存在を背後に隠す特殊な2人称を用い、自らの思春期の経験とドラの脱走を重ね合わせ、当

時のドラの心境を描いている。

私は1960年1月の自分の脱走の際に感じた強い印象を覚えている。あまりにも強く、同じような印象を持つことはめったにない。それは一度に、すべての関係を断ち切る断絶の陶酔だった：人々があなたに押し付ける規律、寄宿学校、先生たち、同級生たちとの突然の意志的な断絶。[…] あなたを愛することのできなかった、彼らから願うべきいかなる助けなどないとあなたが思う両親との断絶[…]。息も止まるほどあなたを驚かせ、あなたを無重力状態にする、激しい熱狂に至る反抗と孤独の感情。[…] 1941年12月のこの街は、[…]すべてが彼女に敵対し彼女の喪失を望んでいた³³。

モディアノは、パリの地形的記憶を出発点に、自伝的小説『血統』にも描かれる、自らの孤独な思春期と当時の家出の断片的な記憶とを重ね合わせ、敵対するドイツが監視するパリをさまよったドラの危険な脱走の背景と脱走がもたらした高揚感、自身を取り巻く状況への反抗、そして孤独を描いている。

ドラが逃亡していた42年2月、冬のパリは、モディアノの父がシャンゼリゼの向かいのレストランで検挙された後、囚人護送車で若いユダヤ人女性達とパリ8区のグレッフリュ通りのユダヤ人問題担当警察へと連行されたが、脱走して一命をとりとめた場所である³⁴。本作品において、パリでのドラの逃亡がモディアノの父の検挙の記憶を喚起し、さらに囚人護送車というモチーフが、モディアノ自身が18歳だった時、不仲の父との口論の際義母に警察を呼ばれ、父と囚人護送車でサンジェルマンデプレの警察署まで運ばれた記憶を「私」の意識に喚起する。パリは青年期のモディアノが彷徨った街であり、土地の記憶、ユダヤ人を父に持つ自身が抱いた反ユダヤ主義への怒り、父の記憶、護送車で運ばれた自身の経験をもとに、家出しパリをさまようドラ、留置場から強制収容所へと送られたユダヤ人犠牲者が検挙され囚人護送車で運ばれた当時の状況を理解する助けになってい

る。本作品の背後には、モディアノ自身の記憶—地理的記憶と想起された情景から喚起される自身の記憶—が常に存在するのである。

第3章 情報の細部からの想像の跳躍

前章では、忘却の層の下に隠されたドラの存在を助け出すため、モディアノが現実の細部である、土地が記憶を喚起する力により生前のドラの姿を描いていることを論じた。本章では、モディアノが証言することのできないドラを空虚から助け出し、姿を描くために重要視するもう一つの要素であるフィクションの要素—想像力について論じる。『1941年。パリの尋ね人』において、モディアノは作家の想像力について、「透視力」という言葉を用いて次のように説明している。「この仕事に必要な想像への努力、思考を詳細な細部に注ぐ必要性、それらの脅迫的なやり方で—道筋を見失わないために、そして安逸に身を任せないために—すべてのこの緊張、この頭脳の訓練は間違いなくそのうち「過去や未来の出来事に関する」短い直感を引き起こす」³⁵と述べている。本作品におけるモディアノにとってのイマジネーションと細部に喚起される、洞察力とも理解できる「直観」は、歴史的資料とそこから喚起されるモディアノ自身の記憶を出発点に、現実の細部からの想像の跳躍³⁶をもたらす。それにより詳細にドラの生前の軌跡を描くことを可能にする。

ヴァンサン・ジュブが『小説の詩学』³⁷で登場人物の構成要素を明らかにしたように、モディアノはドラの人格、時代背景と状況からのドラの行動の想像と理解、敵対するドイツとの関係とアウシュビッツに送られた経緯、写真の詳細な描写による肖像の再構築を試みている。残された資料の情報から喚起される、記憶と想像力で描かれる本作品におけるドラは、語り手の「私」の意識の内部での姿のため、「実際の」行動の描写ではなく、「声」も持たない。しかし、ドラを忘却へと追いや、犠牲者のリスト中の一人にしてしまう資料には描かれない空白をわずかな痕跡、記憶と情報の細部がもたらす想像力の跳躍により補うことで、ドラの姿を再構築し虚無から救いだしている。

この想像力を用いた手法について、モディアノ自身がノーベル賞のディスクールで次のように述べている。「作家の想像は、現実を歪曲するどころか、現実を深く見抜き、外見の背後の本質を見破るために、赤外線と紫外線の力でもってその現実自体を明らかにしなければなりません。」³⁸モディアノにとって想像力は外見の下に隠れた「真実の姿」を明らかにするものと捉えられている。本作品においてモディアノの記憶と詳細な史実を源にした想像力の跳躍で描かれたドラの姿は、小説の登場人物として捏造されたものではない。ドイツによりすべての尊厳を奪われたドラが占領時代のパリで懸命に生きた事実を描き、尊厳を取り戻させるものである。

記憶からのイマジネーションの跳躍

本作品において、作者は実際に起きたショアーという出来事に自身の記憶と想像を注入することで、占領時代のユダヤ人検挙の実態と共に、占領時代を生きたドラと家族、そして多くの犠牲者の姿を作品に描いている。

モディアノが投影された語り手の「私」はドラの脱走の経緯を探った後、複数の資料から1941年12月の脱走以降、尋ね人広告によりパリ中で追われる身となったドラの軌跡を探っている。クリンヤンクール警察の記録³⁹は、警察によりドラが1942年4月17日オルナノ通り41番地の母のもとへと戻されたことを記している。クラルスフェルトがイーヴォユダヤ人研究所で見つけ、モディアノに情報を提供した1942年6月17日付の「マドモワゼル・サロモン宛の通知書」は、4月17日以降再び脱走したドラが1942年6月15日に警察にとらえられ、再び母へ引き渡されたことを次のように告げている。「ドラ・ブリュデールは当月15日、クリンヤンクール地区警察署のはずにより母親のもとへ戻された。連続した逃亡のため、ドラを子供のための感化院へ入れるよう告げられるのだろうか。父親の収容と母の貧困により、警察の女性民生委員達（ジェーヴル河岸）が必要な手続きを取るだろうに、もし我々がそのことを彼女たちに頼むなら。」⁴⁰

この通知書は、「在仏ユダヤ教徒総連合」⁴¹の職

員により作成されたものである。ドイツとヴィシー政権によって作られ、「フランス人のユダヤ教徒の有力者たちにより指導された組織で、占領時代、ユダヤ教共同体のための慈善団体を一つにまとめ」⁴²すべてのフランスに滞在するユダヤ人は加入が義務付けられた。ユダヤ教徒の救済を大義にした一方で、実際は検挙にも利用された。ドラの母親の身分規定と財産の没収による経済的困窮、父の収容所への送還のため、語り手の「私」は、ドラの母が「在仏ユダヤ教徒総連合」にドラと父親の居場所を尋ねるため助けを求め、既にこの組織に存在を把握されていたことを示唆している。

この在仏ユダヤ教徒総連合の職員が、同じ職場で働いていた可能性のある「マドモワゼル・サロモン」へあてた通達は、調書を作成した職員が1942年6月15日に再び捕らえられたドラが強制収容所ではなく、「子供のための感化院」へと送られる事を望んでいたことを示している⁴³。当時、検挙される可能性が少ないと考えられていた子供のための感化院⁴⁴へドラを送るには、民生委員（刑事補佐）の証言に基づく判事の許可が必要だった。そのためこの職員はパリ、ジューヴル河岸にあり、刑事警察の「未成年者保護組織」に属し未成年の保護と援助にあたっていた女性民生委員（刑事補佐）達に自分たちが連絡を取ればドラを感化院に送る手はずを取ってくれるはずだが、ドイツや警察の指示がなく、不可能である旨を告げている。この文面からこの職員は、ユダヤ人が強制収容所に送られることをすでに把握し、ドラを守るため子供の感化院にドラが送られ助けられることを望んだが、在仏ユダヤ教徒総連合の職員には決定する権限がなかったことを示している。同時に、組織はユダヤ人救済の大義の一方、実際のユダヤ人検挙に対して必要な措置を取らずにいたこと—自らもその後検挙の対象となることを知らずに⁴⁵—と同時に、組織の両義性と個人の人道的意図が反映されることのないドイツへの従属、ショアーへの組織的加担⁴⁶を示している。

この通達の後、同年6月19日にドラは、パリ20区のモルティエ通りにあるトゥーレル中間収容所⁴⁷に到着している。モディアノが投影された語り手の「私」は、ドラが警察から母に引き渡されたこ

と、通知書の「度重なる逃亡のため」という文から、ドラの検挙は「ユダヤの星」の違反⁴⁸ではなく家出によるものだったことを示唆している。次に引用する文では、「私」はドラが連行されたクリニャンクール地区警察の地理的記憶と想像力の跳躍から、子供のための感化院に送られる可能性もあったドラが警察へ激しく抵抗したため収容所へ送られたことを見抜き、明らかにしている。

私はよくエルメル通りをビュットモンマルトルかオルナノ通り、両方向へ向けて歩いた、そして私はいくら目を閉じても無駄である。私は晴れた6月の午後に、まるで普通の1日のように、この通りに沿って彼女たちの部屋まで歩くドラとドラの母を想像することが難しい。私は6月15日、このクリニャンクール地区の警察署で、ドラも母ももう何もできない紛糾が起きたと思う。子供たちが両親のものより激しい欲求を抱く事があり、逆境に対して両親より乱暴な態度をとることがある。彼らは遠く、とても遠く、彼らの後ろに両親を残す。そして両親はその後、子供たちを守ることができない。警察官たち、マドモワゼル・サロモン、民生委員たち、ドイツのオルドナンス、フランスの法を前に、彼女の身につけた黄色い星、ドランシーに収容された夫、彼女の「貧しさ」と共にセシル・ブリュデルはとてももろく感じただろう⁴⁹。

語り手の「私」は、地理的記憶と想像力を跳躍させ、警察署を出るドラと母の姿を想像し難いことから、ドラが激しく抵抗したという直感を得ている。その際、「在仏ユダヤ教徒総連合」、当時のフランス警察がユダヤ人検挙に果たした主要な役割とそれらの矛盾したアイデンティティー、これまでの行動と証言が示すドラの反抗的な性格を考慮に入れている。自身を他者と異なる人物として拘束し、不当な法的手続きを行う警察に対し、ドラが取った感情の爆発ともとれる反抗的な態度により、ドイツに従属するヴィシー政権の反ユダヤ人主義体制に抵抗したとみなされたことを表している。こうしてフランス国籍のドラ⁵⁰がトゥーレ

ルへと送られた⁵¹経緯、そして目前で娘が留置場へと送られた母の絶望を描いている。このドラの反抗が実際に行われたという歴史的資料は存在しないが、モディアノは、わずかな痕跡からドラの置かれた状況を正確に読み取り、自らの記憶と想像によりユダヤ人に対する不条理な措置に対し、真向から反抗したドラの真摯な姿を表現するのである。

ドラはトゥーレル中間収容所に到着した2か月後、8月13日に、他の中間収容所からも多数の女性や子供たちを収容していたドランシーの収容所へと送られ、群衆の中で3月の検挙から収容されていた父と再会している。自身が検挙される危険を冒し、占領時代のパリで家出をしたドラを探していた父と娘は収容所で再会するのである。その後、9月18日に、ドラと父は同じ列車でアウシュビッツへ出発している。語り手の「私」は父娘が同日に出発した経緯を、次のように結論付けている。

当局は収容人数超過と自由地帯からの輸送に備えてフランス国籍のユダヤ人をドランシーからピティヴィエ収容所に9月2日と5日、移送することを決めた。[...] おそらく彼らは国籍によって守られるという幻想を持っていただろう。フランス人だったドラもまた、彼らと一緒にドランシーを離れることができたはずだ。彼女はそれをしなかった、見抜くのが簡単な理由で：彼女は父親と残ることを好んだ。二人とも、父と娘は9月18日にほかの多数の男女と共に、アウシュビッツ行の列車でドランシーを離れた⁵²

語り手の「私」の想像は、多くのユダヤ人たちが恐怖におびえる収容所の中で父娘の再会が実現した非情な運命と、厳しい状況の中、父と共に残ったドラの不安と父への愛情を描いている。ドラの家出によりパリ中の反ユダヤ主義の標的となってしまったドラと父の軌跡と、背後で交錯する2人の思いが作者の記憶と想像の跳躍で明らかになる。その後のアウシュビッツの記録は明らかにされていないが、クラルスフェルトの所有する、1963年

にパリで登録されたドラの死亡通知の写真⁵³には、ドラの没年日はこの1942年9月18日と記されている。白井成雄は同じ日にドランシーを出発しアウシュビッツに向かった大部分のユダヤ人が同日ガス室へと送られたと記している⁵⁴。ドラの母は、1943年2月11日にアウシュビッツへと送られた⁵⁵。オットウ・ドゥ・セーヌのバニユー墓地にはドラ一家の写真がはめ込まれた墓石⁵⁶が存在している。

ドラと秘密

本作品の最後で、モディアノが記憶や想像力で明らかにしない、ドラに残された秘密が描かれる点を指摘したい。ドラがアウシュビッツへと向かうまでを想起した語り手の「私」は、ドラの存在の痕跡を感じるパリで、ドラの複数の脱走の際に過ごした隠れ家の謎を想起し、自己の内面に存在するドラに2人称で呼びかけ次のように述べている。「私は彼女が何をして一日を過ごし、どこに隠れ、[...] 彼女が誰と一緒にいたのかずっとわからないだろう。それこそが彼女の秘密だ。あなたを汚し、あなたの命を奪うすべて一死刑執行人たち、オルドナンス、占領と呼ばれたドイツ当局 [...]、収容場、歴史、時間は、可哀そうな、そして大切な秘密をドラから奪うことはできないだろう」⁵⁷と述べている⁵⁸。

このドラの「秘密」の意味を理解するため、モディアノがノーベル賞の授賞式のスピーチで文学作品の「秘密」についてmystère「謎、秘密」という語を用い説明した文を引用したい。「私はつねに詩人と作家は日常生活にのみ込まれた人々と平凡な見かけの出来事に秘密を与えていると考えました [...] 彼らのまなざしの元では、ありふれた人生がついには謎に包まれ、深くに隠された、一見したところ持っていなかった一種の燐光を得るのです。ひとりひとりの奥底に存在するこの燐光と秘密を明らかにすることが詩人、作家と画家の役割です」⁵⁹。モディアノにとっては、登場人物を「秘密」と共に描くことが、存在にリアリティーと特異性をあたえ、その人物の燐光と気高さを表現する。本作品においても、ドイツによる占領時代の犠牲者のリストの一人として忘却の層の下に追いやられたドラの姿を、モディアノは不断の注意

力で見つめて記憶と想像力の跳躍で描き、秘密を与えることでドラの存在に真実味を与えている。同時に、ドラの人生を再構築し、作品の中で再び命を与え忘却の覆いを取ることで、占領時代のパリで懸命に生きたドラと両親、そして多くの犠牲者達の奥底の気品から放たれる光を表現している。本作品で述べられるドラの行動は、資料とモディアノの記憶を元にした想像の範囲を超えることはない。しかし、「事実」に忠実であることだけが人物の真の姿を表現するとは限らない。本作品において作家によるフィクションと記憶の融合、そしてドラに与えられた秘密が、占領時代のパリで家出をし、尋ね人広告により反ユダヤ主義の標的となりながらも懸命に生きたドラ、そして両親との深い愛情と気高い姿を描いている。フィクションと記憶の融合がショアの犠牲者たちの、リストからは計り知れない「真実の姿」を明らかにするのである。

結論

モディアノは、本作品において自らの記憶、想像力の跳躍によりドラの行動を読み解き再構築することで生前の姿を蘇らせている。史実にモディアノ自身の記憶と細部から喚起される自身の想像力を巧みに融合し、当時の状況を直感で見抜き、当時の反ユダヤ主義の実態と共にドラと犠牲者達が占領時代を懸命に生きた姿を描いている。忘却に飲み込まれていた彼らの存在を、本作品で描く事で、共通の記憶へと昇華させた。様々な「記憶」とフィクションが融合する手法は、2014年のノーベル文学賞の授賞式でも「最も捕らえがたい人間の運命を描きだす記憶の芸術」と称されている。本作品の出版後、ドラが両親と住んだパリ18区にドラの名を冠した公道「ドラ・ブリュデール遊歩道」が2015年6月1日新しく開通したことも、犠牲者たちの痕跡を残し、記憶に残そうとするモディアノの試みが成功した証と言えるだろう。その後のインタビュー⁶⁰では、モディアノ自身がドラを忘却の層—死の世界から助け出すオルフェウスとしての役割を果たしたことを認めている。

また、本作品において、モディアノはドラと両親

親にとどまらず、多くの占領時代の犠牲者たちの名前、生年月日、住所を印したリスト、家族から警視庁官へとあてられた助けを求める手紙、警察の調書などを多数引用し、多くの犠牲者の詳細な情報を各個人の性格を物語るエピソードと共に載せている。この手法は、犠牲者たちの存在を尊び、イルスムが本作品を「亡き人々の本」⁶¹と呼ぶように、ドラと同様に多くの証言できない犠牲者を人格と共に描き忘却から助け出すものである。彼らの存在を共通の記憶へと昇華させることで、彼らに光を与えている。モディアノは多くの犠牲者を虚無へと追いやった占領時代のドイツ、ドイツの要求に降伏しユダヤ人検挙に全面協力したヴィシー政権への批判、当時のフランス警察の矛盾するアイデンティティーを本作品において指摘している。作家の記憶と想像力は等しく大きな重要性を持ち、記憶とフィクションの史実との融合により、戦後のエピュラシオンへと続くフランスが抱える歴史—作家が犠牲者を前に感じる虚無感と共に「無実の人を殺した世界」⁶²を訴えている。同時に、存在の証を残さず、証言することなく姿を消した犠牲者たちの存在を、「読む」行為を通し私たちの意識の内部に描くことで、彼らの生きた姿を証明するのである。

¹ 安原伸一郎「ヴェルディ・ヴ事件の子供たちとパリの文壇」、『総合文化研究 第21巻第1号』、日本大学商学部、2015年、など、近年の研究ではホロコーストという語は使われず、フランス語で第2次世界大戦中のナチによるユダヤ人殺戮を表す la Shoah「ショア」が使われている。そのため本論でも「ショア」を用いた。

² 1940年10月4日のフランスの官報「Journal officiel」によると、1940年10月3日の法律では、ヴィシー政権はフランスにおけるユダヤ人を「人種」「民族」を表す語 raceを用い「3人のユダヤ民族の祖父母からの生まれか、もしその人物の配偶者自身がユダヤ人なら、ユダヤ民族の2人の祖父母を持つもの」と定義した。また、1940年10月4日の法律では、居住地の知事の決定により外国籍のユダヤ人を強制収容所へ送ることに言及している。これらの法律については以下を参照した。Légifrance, « Loi du 4 octobre 1940 RESSORTISSANTS ETRANGERS DE RACE JUIVE (INTERNEMENT DANS DES CAMPS SPECIAUX, INSTITUTION D'UNE COMMISSION CHARGEE DE L'ORGANISATION ET DE L'ADMINISTRATION DE CES CAMPS, RESIDENCE

FORCEE) », <https://www.legifrance.gouv.fr/jorf/id/JORFTEXT000000571814> (2021年7月28日)

さらに1941年6月2日の法律による第2回ユダヤ人身分規定では、ヴィシー政府はユダヤ人を次のように定義している。「一次のものをユダヤ人と見なす：1. 何等かの宗教に属すかに関わらず、少なくとも3人のユダヤ民族の祖父母からの生まれか、配偶者自身が2人のユダヤ民族の祖父母からの生まれである場合は、2人のユダヤ民族の祖父母から生まれたものをユダヤ人と見なす。祖父がユダヤ教に属したものをユダヤ民族と見なす；2. ユダヤ教に属するもの、または1940年6月25日にユダヤ教に属していたもの、そして2人のユダヤ民族の祖父母から生まれたものをユダヤ人と見なす。ユダヤ教への無所属は、1905年12月9日の法律（※フランスはこの法律で信仰の自由を保障し、1801年から続いていたコンコルダートは終わりを告げた）以前に国家により認められた他の宗教への加入の証拠により証明される。ユダヤ人と見なされた子供の認知の否認、取り消しは先行する規定の見地からすれば効果はない。」ドイツの要望を受け入れたヴィシー政権は、出生のユダヤ性に着目し、両義的な基準を定めた。これらの基準は民族的であると同時に宗教的であり、多くの人々がこの基準によりユダヤ人と見なされた：人々はユダヤ教に所属しなくとも、ユダヤ教徒の祖先から生まれることもあるし、同様にユダヤ教徒の祖先から生まれなくてもユダヤ教徒であることもある。1941年6月2日の法律の祖父母の基準においては、ユダヤ教への所属がユダヤ民族へ属していることを表すとみなされた。Légifrance, « Loi du 2 juin 1941 PRESCRIT LE RECENSEMENT DES JUIFS », <https://www.legifrance.gouv.fr/jorf/id/JORFTEXT00000512617?isSuggest=true> (2021年7月27日)

³ Patrick Modiano, *Dora Bruder*, Paris, Gallimard, 1997. (パトリック・モディアノ著、白井成雄訳『1941年。パリの尋ね人』、作品社、1998 (2014) 年)

⁴ 当時のフランスは反ユダヤ人主義の多くの法令を定めた。渡辺和行によると、「一九四〇年十月三日から翌年の九月十六日にかけて、ユダヤ人に関する二十六の法律、二十四の法令、六の省令が出された。」渡辺和行、『ナチ占領下のフランス 沈黙、抵抗、協力』、講談社、1994年 (1996年)、137頁

⁵ ドラの父エルネストは、傷痍軍人として25歳でパリにもどったが、フランス国籍を得ることができなかった。(Voir Patrick Modiano, *Dora Bruder*, Paris, Gallimard, coll. « Folio », 1997 (2010), p.25.)

⁶ ヴィシー政権が定めたユダヤ人身分規定により、ユダヤ人が多くの職業から排除され、職を失った。1940年10月から、ヴィシー政権はユダヤ人の身分規定を行い、ユダヤ人に公選の職業、公務員に就くことをほぼ全面的に禁じ、自由業に就業できるユダヤ人に人数制限を加えた。さらに、ユダヤ人に映画、劇場、報道や出版などの分野で就業することを禁じた。(渡辺・前掲書136頁参照) 第2回身分規定については、次の通り。「1941

年6月の第2回のユダヤ人身分規定を定めた法律では、[...] さらに自由業、商業、高等教育の職からはほぼ全体的にユダヤ人を除外した。同年7月からは、新しい法によりユダヤ人が所有する企業、動産、不動産が没収された [...]。さらに、ユダヤ人には旅行、20時以降の外出、公園、劇場、映画、プール [...] への入場、居住地の変更、電話やラジオ、自転車の所有が禁止され、「ユダヤ人」と判を押された身分証明書を常に携帯するよう義務付けられた。1942年5月29日にはドイツにより占領地域の6歳以上のユダヤ人に「ユダヤ人」と書かれた黄色いユダヤの星（注・六角形の星を縫い付けた衣服の着用）を身に着けることが義務付けられた。」Cairn.info, « L'état se met en place (1940-1941) », *Le Monde Juif*, 1992/1 (N° 144), pp.43-67, <https://www.cairn.info/revue-le-monde-juif-1992-1-page-43.htm> (2021年7月30日)

⁷ ギリシャのテッサロニキ出身で、イタリア・トスカナのユダヤ人家庭に属する父（モディアノの祖父）を持つモディアノの父もユダヤ人と見なされた。(Voir Patrick Modiano, *Un pedigree*, Paris, Gallimard, « coll. Folio », 2006 (2010), pp.11-12.)

⁸ *Ibid.*, p.10.

⁹ Le Monde, « Verbatim : le discours de réception du prix Nobel de Patrick Modiano », https://www.lemonde.fr/prix-nobel/article/2014/12/07/verbatim-le-discours-de-reception-du-prix-nobel-de-patrick-modiano_4536162_1772031.html le 7 décembre 2014 (2021年7月30日)

¹⁰ 実際に新聞に掲載された文章は、以下の通り。「私たちは若い娘、ドラ・ブリュデル、15歳、1m55cm、卵型の顔、茶色がかったグレーの瞳、グレーのスポーツコート、赤紫のセーター、マリンブルーのスカートと帽子を身に着けた若い娘を探しています。すべての情報をパリ、オルナノ通り41番地のブリュデル夫妻に送って下さい。」Patrick Modiano, *op. cit.* (n.5), p.7.

¹¹ 「そして私には彼ら（＝ドラ一家）が住んでいた場所が良くわかりました、私はその地区をよく知っていました：オルナノ通り41番地の横のオルナノ43映画館」Gallimard, Rencontre avec Patrick Modiano, à l'occasion de la parution de *Dora Bruder* (1995), <http://www.gallimard.fr/catalog/entretiens/01034347.htm> (2021年8月1日)

¹² France 5, « Rencontre avec Patrick Modiano (2 octobre 2019) », *La grande librairie*

¹³ Serge Klarsfeld, *Le Mémorial de la déportation des Juifs de France*, Paris, B. et S. Klarsfeld, 1978

¹⁴ Gallimard, *op. cit.* (n.11)

¹⁵ « Correspondance Modiano/ Klarsfeld » dans Maryline Heck et Raphaëlle Guidée, *L'Herne Modiano*, Paris, Éditions de L'Herne, 2012, p.178. 以後同書は「Heck et Guidée, *L'Herne Modiano*, 2012」と記す。

¹⁶ Serge Klarsfeld, *Le mémorial des enfants juifs déportés de France*, Paris, FFDJF, 1994. その後、1995年と2001年には多数の犠牲者の写真を加えた同作品の加筆修正版が

出版されている。

- ¹⁷ Patrick Modiano « Avec Klarsfeld, contre l'oubli », Heck et Guidée, *L'Herne Modiano*, 2012, pp.176-177.
- ¹⁸ Voir Gallimard, *op. cit.* (n.11)
- ¹⁹ Mireille Hilsum « Serge Klarsfeld/ Patrick Modiano : enjeux d'une occultation », Heck et Guidée, *L'Herne Modiano*, 2012, p.188.
- ²⁰ Maryline Heck « Avant-propos », Heck et Guidée, *L'Herne Modiano*, 2012, p.175.
- ²¹ Patrick Modiano, *op. cit.* (n.17), p.176.
- ²² 「私たちがこれらの人々（＝ドラー家）について知っていることは度々単なる住所に要約される。そしてこの地理的正確さは私たちが彼らの人生について常に知らないであろうことと対比される—この空白、この世に知られていない人々と沈黙の塊」 Patrick Modiano, *op. cit.* (n.5), p.28.
- ²³ モディアノは、ノーベル賞受賞時のディスクリールで自らの記憶を次のように表現している。「いくつかの過去の断片、名の知れぬ人々と世に知られていない人々がこの世に残したわずかな跡を集めようと試みるこの特殊な記憶は、私の出生の年、1945年に結びついています。」 *Le Monde*, *op. cit.* (n.9)
- ²⁴ 作品における記憶の想起と土地の関連について、モディアノは以下のように語っている。「ある場所で生まれ、生きた人々にとって、年月が経つにつれて、それぞれの地区、街のそれぞれの通りは思い出、出会い、悲しみ、幸福な時を思い起こさせます。そして多くの場合、同じ通りはあなたにとって次々と思い起こされる記憶につながり、その結果、街の地形のおかげで、あなたの人生のすべてが次々と起こる層によってあなたの記憶に甦ります、まるであなたが二重写本の重なり合った筆跡を読み解くことができるように。そしてまた、通りやラッシュアワーの地下鉄の廊下ですれ違ったほかの人々の、これらの大勢の見知らぬ人々の人生も。それで私の若いころ、書くことに役立てるために古い電話帳、とりわけ建物の番地のついた通りによって名前が目録にされたものを見つけ出そうとしました。[...] 見知らぬ人の名前、住所、電話番号に鉛筆で下線を引き、どのような人生だったのか、無数の名前の中で、想像するだけで十分でした。」 *Ibid.*
- ²⁵ Cyril Grange et Elizabeth Molkou, « Sur les traces de Dora Bruder » dans Claude Gauvard et Jean-Louis Robert (dir.), *Être Parisien*, Paris, Éditions de la Sorbonne, 2016 (2004), <https://books.openedition.org/psorbonne/1474?lang=fr> (2021年7月30日)
- ²⁶ Patrick Modiano, *op. cit.* (n.5), p.38.
- ²⁷ 「ロスチルド病院の産科。サンテルヌ通りはガールドリリー通りと寄宿舎の壁の延長上にあった。静かな木陰の地区。25年前、1971年6月に私がこの地区を一日中散歩した時は、何も変わっていなかった。[...] この午後、私は誰かの跡の上を歩いている気がした。」 *Ibid.*, pp.48-49.
- ²⁸ *Ibid.*, pp.39-40.
- ²⁹ *Ibid.*, pp.45-46.
- ³⁰ パリの古文書保管所である Archives de Paris の電子アーカイブでは、この一斉検挙に関する10区区長と16区区長のセーヌ県（当時）知事にあてた手紙が閲覧できる。ここでは区役所が一斉検挙に利用されたことが記されている。Voir Archives de Paris, « Lettres des maires des 10e et 16e arrondissements au préfet de la Seine concernant une rafle effectuée par les autorités allemandes. », <http://archives.paris.fr/a/697/lettres-des-maires-des-10-sup-e-sup-et-16-sup-e-sup-arrondissements-au-prefet-de-la-seine-concernant-une-rafle-effectuee-par-les-autorites-allemandes/> (2021年7月31日)
- ³¹ Patrick Modiano, *op. cit.* (n.5), pp.75-77.
- ³² France 5, *op. cit.* (n.12)
- ³³ Patrick Modiano, *op. cit.* (n.5), pp.77-78.
- ³⁴ Voir *Ibid.*, p.62.
- ³⁵ *Ibid.*, pp.52-53.
- ³⁶ France 5, *op. cit.* (n.12) において、モディアノは自らの著書 *Encre sympathique* でも、現実の細部が小説のための想像力をもたらすことに言及している。
- ³⁷ Vincent Jouve, *La poétique du roman*, Malakoff, Armand Colin, 2001, pp.56-66.
- ³⁸ *Le Monde*, *op. cit.* (n.9)
- ³⁹ Patrick Modiano, *op. cit.* (n.5), p.87.
- ⁴⁰ *Ibid.*, p.101.
- ⁴¹ UGIF と表記される、L'Union générale des israélites de France のこと。安原・前掲書、では「在仏ユダヤ教徒総連合」という訳が用いられているため、本論でもこの名称を用いた。マルティネスとスコット・ディ・コヴェラによると、「在仏ユダヤ教徒総連合」はドイツの要望を受け、ヴィシー政権により1941年11月29日の法によりに設立された。（Voir Gilles Martinez et Thierry Scotto di Covella, *La France de 1939 à 1945 Le régime de Vichy, l'Occupation, la Libération*, coll. « MÉMO SEUIL », Éditions de Seuil, Paris, 1997, pp.35-36）渡辺和行は、「在仏ユダヤ教徒総連合」はヴィシー政権が設置した「ユダヤ人問題総合委員会」（Commissariat général aux questions juives, CGQJ）に支配された組織で、大ブルジョワのユダヤ人指導者たちが、貧しい東欧や外国籍のユダヤ人を優先的にドイツに引き渡したことを指摘している。（渡辺・前掲書140-141頁参照）
- ⁴² Patrick Modiano, *op. cit.* (n.5), p.106.
- ⁴³ 本作品にも、この職員の意図を示す一文がある。「メットレーの刑務所—彼らがドラを送りたかった子供の感化院の一つ」 *Ibid.*, p.138.
- ⁴⁴ しかしながら、モディアノが本作品において、パリ12区にあったロスチャイルド孤児院において両親が既に検挙されていたユダヤ人の子供たちが検挙された（1943年）ことに触れているように、孤児院の中にも一斉検挙の標的となるものがあった。（Voir *Ibid.*, p.49.）
- ⁴⁵ 本作品には、ユダヤ人で構成される職員と幹部は当初

- は検挙を免れたが、1943年からは「在仏ユダヤ教徒総連合」の職員や幹部あわせて数百名が検挙され収容所へと送られたとの記載がある。(Voir *Ibid.*, p.107.)
- ⁴⁶ 渡辺も「在仏ユダヤ教徒総連合」が移民のユダヤ人が検挙され、子供が逮捕されても何も救援しなかったことを指摘している。(渡辺・前掲書141頁参照)
- ⁴⁷ 「それ(＝トゥーレルの収容所)は1940年10月に、法律に「違反した」外国人ユダヤ人を収容するために設置された。しかし1941年から男性達が直接ドランシーやロワレの収容所へ送られる時、ドイツのオールドナンスに違反するユダヤ人女性達だけが共産主義者や普通犯と同様にトゥーレルへ送られる。」Patrick Modiano, *op. cit.* (n.5), pp.60-61.
- ⁴⁸ 第8回オールドナンスでは、1942年6月7日からユダヤ人に「ユダヤの星」の着用を義務付けた。違反した場合、16歳以上のユダヤ人は検挙された。(Voir *Ibid.*, pp.102-104.)
- ⁴⁹ *Ibid.*, pp.109-110.
- ⁵⁰ ドイツの要求に反し、当初ヴィシー政権はフランス国籍のユダヤ人を強制収容所へ送ることに反対し、外国籍のユダヤ人を強制収容所に送るよう定めていた。しかし法律違反、一斉検挙での摘発、ドイツのオールドナンスへの違反、レジスタンス活動などに関わった場合はフランス国籍のユダヤ人であっても検挙された。次第に検挙の対象はフランス国籍のユダヤ人や子供たちへと広げられた。マルティネスとスコット・ディ・コヴェラは、占領時代に犠牲になったフランス在住のユダヤ人の内、「外国籍のユダヤ人は犠牲者の多くを占めている：彼らのうちの30%が亡くなった。フランス国籍のユダヤ人の割合は16%である」と記している。Gilles Martinez et Thierry Scotto di Covella, *op. cit.*, pp.36-37.
- ⁵¹ 当時、警察はユダヤ人などのトゥーレルへの収容を判事の介入なく決定することができた。「1940年10月末、警視庁によりトゥーレルの兵舎に収容所が設置され、物資の供給はセーヌ県庁、武装警護はもっぱらフランス憲兵により行われた。行政上の強制収容は判事の介入なく、違反に関わることもなく、一般には時間の制限なく、警察により決定された監禁である。」Musée de l'Histoire vivante, « LE CAMP D'INTERNEMENT DES TOURELLES 1940-1944 », <http://www.museehistoirevivante.fr/expositions/anciennes-expositions/le-camp-d-internement-des-tourelles-1940-1944> (2021年8月5日)
- ⁵² Patrick Modiano, *op. cit.* (n.5), p.143,
- ⁵³ « Documents et photographies », Heck et Guidée, *L'Herne Modiano*, 2012.
- ⁵⁴ 「この列車で輸送されたユダヤ人は一千人、うち到着後ただちにガス室送りとなったものは八百五十九人、強制労働に従事させられた者は男性三十一人、女性百十人、そして一九四五年時点での生存者は男性二十一人」とある。パトリック・モディアノ著、白井成雄訳、前掲書180頁
- ⁵⁵ ドラの母は、1942年7月16日にデル・ヴィヴの一斉検挙で一度検挙されドランシーに収容されたが、ブタペスト生まれで当時はハンガリー出身のユダヤ人には収容所へ送られる命令が出ていなかったため、1週間後に釈放されている。その後、再び検挙され1943年1月9日に再びドランシーに送られ、同年2月11日にアウシュビッツへと送られている。(Voir Patrick Modiano, *op. cit.* (n.5), pp.143-144.)
- ⁵⁶ « Documents et photographies », Heck et Guidée, *L'Herne Modiano*, 2012.
- ⁵⁷ Patrick Modiano, *op. cit.* (n.5), pp.144-145.
- ⁵⁸ クラルスフェルトはモディアノに、最初の脱走後1942年6月までにドラが一度検挙されトゥーレルの収容所に収容された後、両親または母のもとに返された可能性を伝えている。(Voir « Correspondance Modiano/ Klarsfeld » Heck et Guidée, *L'Herne Modiano*, 2012, p.186.) しかし、本作品ではドラが2月に検挙された可能性が考慮されるにとどまり、確証となる手掛かりは示されていない。
- ⁵⁹ Le Monde, *op. cit.* (n.9)
- ⁶⁰ France 5, *op. cit.* (n.12)
- ⁶¹ Mireille Hilsum « Serge Klarsfeld/ Patrick Modiano : enjeux d'une occultation », Heck et Guidée, *L'Herne Modiano*, 2012, p.190.
- ⁶² Patrick Modiano, *op. cit.* (n.17), p.176.